

## II. 弟子の心得

### 1. 「弟子」の意味と 弟子への召し

#### (1) 「弟子」の意味

マタイ 28 : 19 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子と  
なさい。

この箇所で、「弟子とする」と訳されているギリシア語の原意は、誰かを自分の生徒にする、という意味である。従って、弟子とは、師と仰ぐ人から何かを教えてもらう人、学ぶ人を指す。私たちは、イエスの弟子、キリストの弟子である。

#### (2) 弟子への召し

マタイ 11 : 28~30 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来な  
さい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっ  
ているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そ  
うすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの  
荷は軽いからです。

イエスがユダヤ人たちに、イエスの弟子となるように呼びかけている。

ここでの文脈は、【イエスをメシアとして認めてイエスに従うか、それとも当時のユダヤ教パリサイ派の口伝律法に従うか、選択せよ】である。ユダヤ教パリサイ派が設けた口伝律法の膨大な細則を日常生活で守るのは、当時の人々にとって大変な重荷であった。そのような苦勞をしながら、人々には、永遠のいのちを得ている喜びは感じられず、たましいに安らぎはなかったのである。

「くびき」とは、牛に荷車を引かせるときに荷車の轆（ながえ）の先につけ、牛の首に当てる横木のことである。「わたしのくびきを負いなさい」とは、パリサイ的ユダヤ教のくびきを外して、イエスにわが身を差し出し、従いなさいということ。その次に、「わたしから学びなさい」となる。イエスから学ぶ人は、イエスの弟子である。ここでイエスが弟子と呼ぶのは、イエスにわが身を差し出した人である。弟子への召しに応答するには、まずは、イエスのくびきを負う、その上でイエスから学ぶ、である。

## 2. 弟子になること 及び 世との関係

### (1) 弟子になること

ルカ 9 : 23~26 イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の益があるでしょうか。だれでも、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子もまた、自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやって来るとき、その人を恥じます。

下線部「自分を捨てる」・・・直訳すると「自分に対して、おまえはもうだめだと言いなさい」。

価値ある自分を思い切って犠牲にすることでは、ない。自分には何の力も良いところもない、そう認めて、自己否定せよ、ということである。

これがあるって、自分を神に差し出すことができる。

「自分を捨てる」とは、「献身」を別のことばで言い表したのものである。献身は、信者がキリストの弟子として歩み始める時に最初にする、1回限りの行為である。

「自分を捨てる」ことも1回限り、自分を捨ててイエスについていく者となる。

下線部「日々自分の十字架を負う」・・・自分の十字架を負うとは、イエスと同じ目に遭うということ。特に、イエスが受けた拒絶と同じような、この世からの拒絶、周りの人々からの拒絶である。

キリストの弟子は、喜んで辱しめを受け、喜んで拒絶される。

この歩みは、「日々」の歩み、継続的な歩みである。

### (2) 世との関係・・・弟子は、この世とはどのような関係になるか

ヨハネ 15 : 18~25

- ① 18~19 節 世は弟子たちを憎む
- ② 20~21 節 世はメシアを憎む
- ③ 22~25 節 世はメシアと父なる神を憎む 世は罪に定められる